

O2-014

大学生におけるヘルスリテラシーに関する 実態調査

古谷 佳由理¹、小澤 典子²、平賀 紀子³

¹埼玉県立大学保健医療福祉学部 看護学科、

²筑波大学大学院人間総合科学研究科 看護科学専攻 博士後期課程、

³茨城県立こども病院

【目的】

ヘルスリテラシー (Health Literacy: 以下HL) は、世界各国の健康政策やヘルスプロモーション戦略として重要視されている概念である。WHOではHLを「良い健康を維持増進するために情報へアクセスし、理解し、活用する動機づけと能力を決定する認知的・社会的スキル」と定義し、ヘルスプロモーションにおける大事な概念の一つとして提示している。意思決定や健康管理を行うための正しい情報を獲得する上で、HLは必要な能力であると考え、大学生のヘルスリテラシーの実態を明らかにすることを目的に本研究に着手した。

【方法】

本研究は、質問紙による横断的研究であり、対象者は総合大学に通っている大学生とした。調査項目は、属性およびHL尺度とした。HL尺度は、基本的な読み書き能力を指す帰納的HL、情報を入手・伝達・適用する能力を指す相互作用のHL、情報を批判的に吟味する能力を指す批判的HLから構成され、4段階リッカート方式で回答を求めた。得点が高いほどHLが高いことを表す。HL尺度得点の平均値と属性との関係を検定および相関分析で確認をした。分析にはIBM SPSS statistics ver.22を使用し、有意水準は $p < .01$ とした。本研究は大学の倫理委員会の承認を得て行った。

【結果】

対象者は116名であり、9割が女性だった。平均年齢は19.4歳であり、一人暮らしをしている者は全体の3/4であった。HL尺度の総点の平均値は41.3点(25-56)、下位尺度では、機能的HLは15.8点(10-25)、相互作用のHLは14.1点(4-20)、批判的HLは11.2点(4-16)であった。総点はすべてのHLと相関が認められ、下位尺度間では相互作用のHLと批判的HLとの間で相関が認められた。20歳以上の対象者では、伝達的HL、批判的HL、HLの総点で有意に高く、家族と同居をしている者では年齢による差が認められなかったが、一人暮らしをしている対象者では差が認められた。

【考察】

年齢による機能的HLに差が認められなかった。これは一定の入学試験に合格した大学生が対象者であったためと考えられる。一人暮らしをしている対象者でHLが有意に高かったが、この理由として、彼らは親から自立した生活を送っていることから、親を頼りにするのではなく、彼ら自身で説明をする、物事を判断することを多く経験しているために身につけていったのではないかと推察される。本研究は科研費(26670970)の助成を受けて実施した。